

図書館だより

埼玉県立図書館

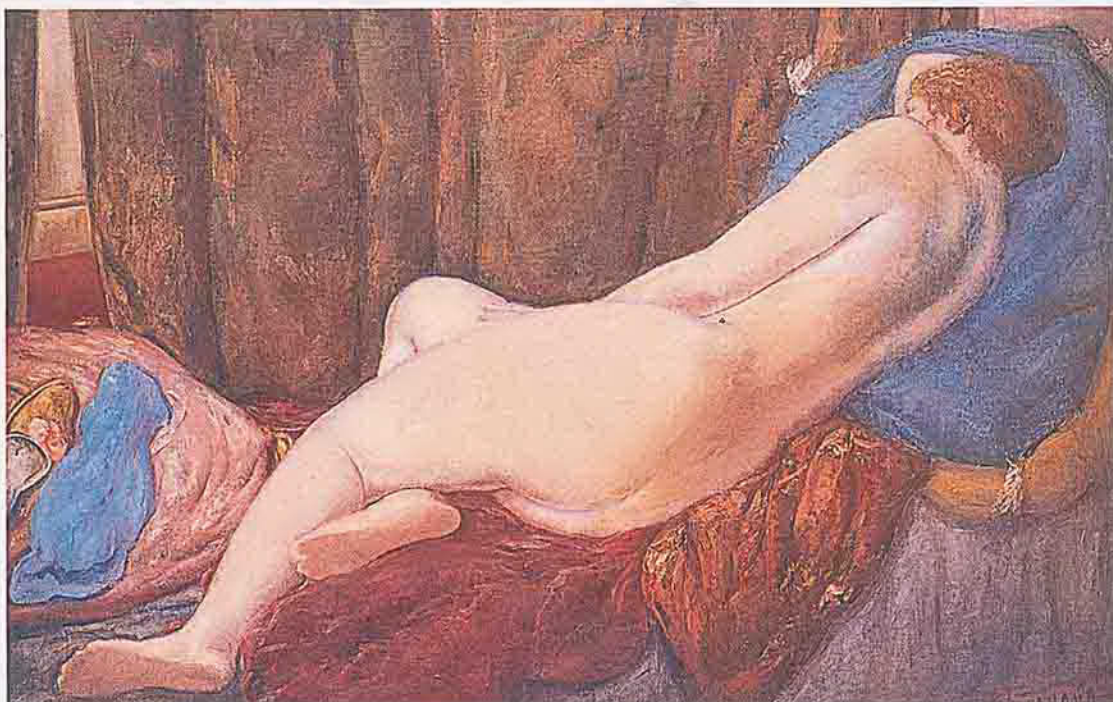
第53号
平成4年11月1日

編集 埼玉県立図書館
広報委員会
発行 埼玉県立浦和図書館
館長 新井 一久
浦和市高砂3-1-22
電話 048 (829) 2821

《埼玉の画家》

(主な内容)

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| ●「描かれた背中」(大久保静雄).....(1) | ●本のひろば.....(4-5) |
| ●「埼玉の画家素描」(水野 隆).....(2) | ●11-12月の主な催し物.....(6-7) |
| ●随筆・樹木.....(3) | ●Q & Aコーナー.....(8) |



田中 保 《横たわる裸婦》 油彩 キャンヴァス 96.1×127.1cm

描かれた背中

大久保静雄

田中保という画家は、裸婦をテーマにした作品を、多く描いている。おそらく、ルノワールと同様に、裸婦への関心が強かったのだろう。それは、彼の風景画や静物画と較べてみるとよくわかる。田中の個性が、はつきりと現われているのは、やはり、裸婦であるといつてよい。

この《横たわる裸婦》は、彼の作品にしては、デフォルメや色彩もおとなしく、安らぎに満ちている。

十九世紀のフランス人画家、アングルは、《オダリスク》という作品で、裸婦の間延びた背中を観る人に印象づけた。この作品も、アングルと同様の効果をねらっているのだろう。黄緑色とブルーのクッションに上半身を軽く沈め、足元には、それと同色の布とスリッパがある。田中は、ここで、左右の色彩を照応させることによって、画面のバランスをとっている。それは、また、この裸婦の頭からつま先へと向かう、安定した対角線構図が、この絵の背後にあることを忘れてはならない。

(埼玉県立近代美術館・主任学芸員)

2012345678913012345

埼玉の画家素描

水野 隆

ある市場調査によれば、全国で絵具・画材の売り上げの最も多いのが浦和市だったそう。戦前から「鎌倉文士に浦和絵かき」といわれたくらいだからプロはもちろん、その卵や愛好者がまことに多い。しかし近年の県展、各種グループ展などの状況をみると、県南に限ったことでなく、埼玉全体の美術への関心が非常に高く、優れた作家が次々と輩出しているように思う。

こうした活況の基を築いたのが明治の末から大正、昭和にかけての洋画家の活躍であり、日本の近代美術史上にも重要な足跡を残している。加須市出身の斎藤与里は若くしてパリに渡り、後期印象派やフォーヴィスムの洗礼を受け、帰国後いち早くこれらの新潮流を日本に紹介した。また我が国最初の在野のグループ展「フューザン会」を岸田劉生らと結成したほか、終生日本人の感性や風土に根ざした油絵の確立に情熱を傾けた熊谷市出身の森田恒友は、同様に渡欧しセザンヌに感銘しその造形の骨格を学んで帰国した。しかしその後

日本人の気質や自然観に油彩画はしっくりこない。水墨画に転向してしまった。与里、恒友とともにフランスの新しい芸術思潮を吸収しながら、一方は風土と体質にあった日本化の道を、他方は違和感から東洋的な水墨へと各々別の方向を歩むことになった。一方、越谷市出身の斎藤豊作は、やはりパリで本格的な印象派の点描技法を身につけて帰国し、二科会の舞台で純度の高い色点が交響する美しい作品を発表し注目されたが、やがてフランス人の夫人と渡仏し再び帰ることなく日本の画壇から消えてしまったのである。豊作とは逆に忘却の淵から蘇ったのが岩槻市出身の田中保である。十八歳で單身シアトルに渡り、ピーナツ売りなど苦勞の末画家となり、アメリカ人の夫人と共に斎藤豊作が渡仏した同じ年、パリに進出した。「裸婦のタナカ」として名を高めたが第二次大戦中のパリで客死し近年まで全く存在が知られなかった幻の画家である。これら埼玉洋画の先駆者は、いずれもパリとの関わりにおいて自分の芸術を確立していった。彼らの作品には、それぞれの波乱に満ちた人生の光と影が映し出され大変興味深い。

では風土が異なり画家のタイプにも相違がある。穏やかな県南では、昭和の初めから浦和に住み「裸婦を描く聖者」といわれた寺内萬治郎や、温かい色彩の点描で知られる高田誠といった温かな人柄と作風の画家が多いようだ。寺内に教養を受けた渡辺武夫、金子徳衛、田中実、高田の率いる一水会系では川村親光、小松崎邦雄など脂の乗った活躍をみせている。

一方、県北は冬の空つ風、夏の猛暑といった風土から、気性の激しい自己を強く打ち出すタイプの作家が多い。その代表が吹上町出身の須田勉太で、内から湧き上がる猛烈な創造のエネルギーを画面にたたきつけた奔放で重厚な作品で知られる。里見明正、志郎武久、小此木桂作らの作風もこれに連なるタイプといえよう。また県西の川越は「小江戸」と呼ばれ、落ち着いた情趣をもつ風土から優れた日本画家が生まれている。明治期の近代日本画の礎を築いた橋本雅邦は当地にゆかりの深い画家であった。再興院展で速水御舟とならび画才を発揮し、静穏で雅趣に富んだ風景や動物を描いた小茂田青樹、江戸の鈴木春信の系譜をひくたおやかな美人画をはじめ舞台装束や挿絵



(埼玉県立近代美術館学芸部長)

essay

樹木

この街を歩くようになって半年になる。駅前通りも大きい市役所通りには巨木がそびえ、広い歩道は木陰となつて夏の暑さもやわらかく、街中の川には錦鯉が遊び、広い公園は噴水のある洋風庭園から木立を過ぎて日本庭園、さらに進めば広い芝生の原っぱと歩いて飽きない。夏の夕方公園に、歩道を踏み入るとさっと涼風が迎えてくれる。

この街には歩道橋が多い。歩道橋の上から見ると広く真っ直にビルが続く谷間を多くの車が行き交う。今では自動車は生活必需品だから近代文明社会の完成された図を見るようだが、車はガソリンや軽油を燃やして走る。夏、てくてく歩く身には何もこの暑いなか石油を燃やしてまで暖房してくれなくてもいいのにたまに思う。自動車はなくなったらどうなるだろう。人は歩いたり電車に乗るから

いい。物資の搬送、突き詰めていけば味噌醤油はどうするか。牛や馬車で運ぶ。大規模輸送は無理だけれど、のんびりしていいかもしれない。昔の人はそうしてきた。自動車の発明は人々の行動範囲を広げた。真夏でも汗をかかずに移動できる。運転はストレスの解消になり人々を活発にする。「活力ある社会」に車は不可欠だ。今の日本で自動車をなくすのは無理だ。

夏、神社を見つけた。京都の祇園祭に似た節まわしを聞いて、それがこの夏祭りの練習だと教えてもらった。行って見ると大きな社の回りに樹齢数百年と思われる大木が何本かそびえ立つ。境内ではまわりの喧騒から少し隔絶されたような、不思議な気分になる。人間の背の高さの十倍はあろうかと思われる木がその葉で音を吸収しているのかもしれない。あまり広くないその境内を歩くと、なにか包み込まれるような不思議な気分になる。木は動かないが生きているのかと気付く。

(熊岡 丁・日)

本の ひるば

— 埼玉の画家 —

複製絵画の貸し出しを始めた図書館が利用者から好評を博するなど、絵画がより身近なものとなってきました。親近感のわく郷土の画家の作品にふれることも、絵画に親しむきっかけになるのではないのでしょうか。今回は県立図書館で所蔵する埼玉県にゆかりの深い画家の資料をご紹介します。

相原求一朗 (一九一八—)

川越市出身。洋画。独学で油彩画を習う。戦後になって猪熊弦一郎に師事する。北海道の風景画を多く描いている。

・相原求一朗画集 講談社 '84

・相原求一朗作品集 日動出版部

'77 (川久)

岩崎勝平 (一九〇五—一九六四)

川越市出身。洋画。本郷美術研究

所で岡田三郎助の指導を受け、東京美術学校在学中は、藤島武二に学ぶ。川端康成から「神様絵かき」と呼ばれた。

・川越市風景絵はがき 川越市

市立博物館 '91 (川)

・奥原晴湖 (一八三七—一九一三)

下総国 (現茨城県) 出身。文人画。晩年、熊谷市に移り住んだ。豪放な画風で知られたが、熊谷移住後は精緻な画風の作品を描いた。

・奥原晴湖 茨城県歴史館 '88

・「奥原晴湖展」展示品目録 埼玉

県立博物館 '78 (浦熊川)

小茂田青樹 (一八九一—一九三三)

川越市出身。日本画。松本楓湖に師事する。大正四年より院展に出品、のちに同人となる。同門の速水御舟らと目黒派を形成した。

・小茂田青樹とその周辺 埼玉県立

近代美術館編・発行 '84 (浦熊川久)

河鍋曉斎 (一八三一—一八八九)

下総国 (現茨城県) 出身。江戸に

出て歌川国芳や狩野洞白らに学んだ。川越をはじめ埼玉県各地を訪れて作品を残している。曉斎記念美術館は蔵市所在。

・河鍋曉斎展 浮世絵太田記念美術

館 '89 (浦川)

北沢楽天 (一八七六—一九五五)

大宮市出身。漫画。東京麴町の絵画研究所大幸館で学ぶ。政治批判や社会風刺などの時事漫画で新境地を開き、近代漫画の創始者といわれる。

・楽天漫画集大成 明治、大正、昭和

編 長崎扶天編 北沢楽天顕彰

会 '73 '76 (浦熊川久)

北爪益雄 (一八九七—一九七二)

大里郡三ヶ尻村 (現熊谷市) 出身。洋画。東京美術学校卒。二科展、春陽会展入選。教師を勤めながら風景画や静物画を描いた。

・北爪益雄画集 北爪雄一 '89

〔浦熊川久〕

互井開一 (一九〇四—一九六七)

北葛飾郡三輪野村 (現吉川町) 出身。洋画。二科展、第二部会展などに入選。親しみやすい水彩画を描いた。

・寺内萬治郎展 埼玉県立近代美術

館編 読売新聞社 '85 (浦熊川久)

橋本雅邦 (一八三五—一九〇八)

江戸木挽町出身。日本画。父は川越藩の絵師、橋本晴園養邦。明治維新の際は川越にしばらく滞在した。新日本画の確立に努めた。

・雅邦 第一号 早川智明編 山崎

美術館 '82 (浦熊川)

・特別展橋本雅邦 山種美術館 '90

〔川〕

古川弘 (一九〇七—一九七七)

児玉郡大沢村 (現美里町) 出身。洋画。熊谷中学の大久保喜一に指導を受ける。教師を勤めながら、牧歌的な水彩画を描いた。

・古川弘 沢田利一編著 第一法規

出版 '89 (日本の水彩画9) (浦川)

丸木位里 (一九〇一—)

位里は広島県出身。田中頼璋に師事する。俊は北海道出身。女子美術専門学校卒。昭和16年結婚。昭和25年、共同制作のライフワーク「原爆の図」出版。昭和42年東松

所で岡田三郎助の指導を受け、東京美術学校在学中は、藤島武二に学ぶ。川端康成から「神様絵かき」と呼ばれた。

・川越市風景絵はがき 川越市

市立博物館 '91 (川)

・奥原晴湖 (一八三七—一九一三)

下総国 (現茨城県) 出身。文人画。晩年、熊谷市に移り住んだ。豪放な画風で知られたが、熊谷移住後は精緻な画風の作品を描いた。

・奥原晴湖 茨城県歴史館 '88

・「奥原晴湖展」展示品目録 埼玉

県立博物館 '78 (浦熊川)

小茂田青樹 (一八九一—一九三三)

川越市出身。日本画。松本楓湖に師事する。大正四年より院展に出品、のちに同人となる。同門の速水御舟らと目黒派を形成した。

・小茂田青樹とその周辺 埼玉県立

近代美術館編・発行 '84 (浦熊川久)

河鍋曉斎 (一八三一—一八八九)

下総国 (現茨城県) 出身。江戸に

出て歌川国芳や狩野洞白らに学んだ。川越をはじめ埼玉県各地を訪れて作品を残している。曉斎記念美術館は蔵市所在。

・河鍋曉斎展 浮世絵太田記念美術

館 '89 (浦川)

・互井開一 水沢勉編著 第一法規出版 '89 (日本の水彩画8) (川)

小松崎邦雄 (一九三一—)

東京都出身。幼時に浦和市に移り住む。洋画。東京芸術大学卒。東郷青児美術館大賞など多くの賞を受けている。

・小松崎邦雄の水彩画 河出書房新

社 '90 (アート・テクニクナウ

6) (川)

小村雪岱 (一八八七—一九四〇)

川越市出身。日本画。東京美術学校卒。在学中は下村観山に、卒業後は松岡映丘に師事する。美人画を得意とするが、挿画も一流。

・小村雪岱 埼玉県立近代美術館

'83 (浦川久)

・小村雪岱画集 国書刊行会 '87

〔浦川〕

斎藤三郎 (一九一七—)

熊谷市出身。洋画。本郷絵画研究所で学ぶ。昭和47年内閣総理大臣賞、埼玉県文化賞受賞。卓抜した描写力に定評がある。二科会所属。

・斎藤三郎画集 日動出版部 '83

〔熊川久〕

・斎藤三郎展作品集 長谷川徳七編

〔熊川久〕

山内萬治郎展 埼玉県立近代美術

館編 読売新聞社 '85 (浦熊川久)

橋本雅邦 (一八三五—一九〇八)

江戸木挽町出身。日本画。父は川越藩の絵師、橋本晴園養邦。明治維新の際は川越にしばらく滞在した。新日本画の確立に努めた。

・雅邦 第一号 早川智明編 山崎

美術館 '82 (浦熊川)

・特別展橋本雅邦 山種美術館 '90

〔川〕

古川弘 (一九〇七—一九七七)

児玉郡大沢村 (現美里町) 出身。洋画。熊谷中学の大久保喜一に指導を受ける。教師を勤めながら、牧歌的な水彩画を描いた。

・古川弘 沢田利一編著 第一法規

出版 '89 (日本の水彩画9) (浦川)

丸木位里 (一九〇一—)

位里は広島県出身。田中頼璋に師事する。俊は北海道出身。女子美術専門学校卒。昭和16年結婚。昭和25年、共同制作のライフワーク「原爆の図」出版。昭和42年東松

所で岡田三郎助の指導を受け、東京美術学校在学中は、藤島武二に学ぶ。川端康成から「神様絵かき」と呼ばれた。

・川越市風景絵はがき 川越市

市立博物館 '91 (川)

・奥原晴湖 (一八三七—一九一三)

下総国 (現茨城県) 出身。文人画。晩年、熊谷市に移り住んだ。豪放な画風で知られたが、熊谷移住後は精緻な画風の作品を描いた。

・奥原晴湖 茨城県歴史館 '88

・「奥原晴湖展」展示品目録 埼玉

県立博物館 '78 (浦熊川)

小茂田青樹 (一八九一—一九三三)

川越市出身。日本画。松本楓湖に師事する。大正四年より院展に出品、のちに同人となる。同門の速水御舟らと目黒派を形成した。

・小茂田青樹とその周辺 埼玉県立

近代美術館編・発行 '84 (浦熊川久)

河鍋曉斎 (一八三一—一八八九)

下総国 (現茨城県) 出身。江戸に

出て歌川国芳や狩野洞白らに学んだ。川越をはじめ埼玉県各地を訪れて作品を残している。曉斎記念美術館は蔵市所在。

・河鍋曉斎展 浮世絵太田記念美術

館 '89 (浦川)

北沢楽天 (一八七六—一九五五)

大宮市出身。漫画。東京麴町の絵画研究所大幸館で学ぶ。政治批判や社会風刺などの時事漫画で新境地を開き、近代漫画の創始者といわれる。

・楽天漫画集大成 明治、大正、昭和

編 長崎扶天編 北沢楽天顕彰

会 '73 '76 (浦熊川久)

北爪益雄 (一八九七—一九七二)

大里郡三ヶ尻村 (現熊谷市) 出身。洋画。東京美術学校卒。二科展、春陽会展入選。教師を勤めながら風景画や静物画を描いた。

・北爪益雄画集 北爪雄一 '89

〔浦熊川久〕

互井開一 (一九〇四—一九六七)

北葛飾郡三輪野村 (現吉川町) 出身。洋画。二科展、第二部会展などに入選。親しみやすい水彩画を描いた。

・寺内萬治郎展 埼玉県立近代美術館編 読売新聞社 '85 (浦熊川久)

らびぶらりい

11・12月の主な催し物

●県立浦和図書館 (四六八二九一六三)

図書館資料と版画・写真で見る「埼玉の自然百選」 1階ホール

11月10日(火)～15日(日) 9時～17時

内容 豊富な版画や写真と共に「埼玉の自然百選」の資料を紹介。13日(金)には「ふるさとの秋」他の映画も同時上映。



埼玉県立図書館蔵

ふるさと埼玉を知る映画会

11月13日(金) 14時

「ふりむいて120 みてみて未来さいたま」

豊かな自然と600万県民の活力を擁した変貌著しい埼玉の歩みを紹介する。

「ふるさとの点描

「埼玉の自然と観光」

埼玉の自然・祭り・文化財等を紹介し、ふるさとの素朴な風情を四季を通して詩情豊かに描く。

「ふるさとの秋

「埼玉の四季シリーズ」

家族ぐるみで手軽に楽しめる利根川サイクリングコース、田舎教師の里・羽生市、川越まつり、中津仙峡等を紹介。

県民の日子ども映画会

11月14日(土) 10時

「赤毛のアン」

「ディズニーマウスのうさぎとカメ」

土曜親子映画会

12月12日(土) 10時

「おかあさんのやさしい手」

病床の祖父に対する母のやさしい行為に深い感動を覚えたひとりの少女が綴った作文を映像化。

「ムーミン ほくほく王様だ」

冬休み子ども映画会

12月25日(金) 10時・14時

「イワン王子の大冒険」

森の魔王に蛙にされてしまった姫を元の姿に戻そうと、王子は恐ろしい冒険の旅に出かけるが……。

大人も楽しめるアニメ映画の傑作。

「きこりのドナルド」

「サンタのおくりもの」

●県立熊谷図書館 (四六八三三六六)

郷土を知る文化資料展

11月10日(火)～15日(日)

内容 「映画と資料による埼玉の人物探訪」

「渡辺栄一、荻野吟子他を予定」

文芸講演会

11月28日(土) 13時30分

寄居町中央公民館 先着600名

演題 「人生八十年時代・女と男のいい関係」

講師 作家 沖藤典子氏

県民の日親子映画会

11月14日(土) 10時・14時

「オバケちゃん」 「小さな家族」

名作映画鑑賞会

11月7日(土) 10時・14時

「七人の侍」 監督 黒沢 明

12月5日(土) 10時・14時

「利久」 監督 勅使河原 宏

金曜映画会

11月20日(金) 14時

「秩父事件―絹と民権―」

この映画は、秩父事件の背景となる明治十年代を説明する秩父事件序説の試み。

「山の湯けむり―秩父七湯―」

秩父方言と山の湯に故郷のやすらぎを求める。

11月27日(金) 14時

「奥羽の鷹使―日本の狩猟習俗―」

鷹使は自然との調和をはかり、山の掟を守って黙々と暮らす。厳しきの中にも愛情がこめられ、人とタカとの一体感が伝わってくる。

「野生のイノシシ―出産から子育ての記録―」

12月11日(金) 14時

「ニホンザル物語・家族」

長野県志賀高原横湯川。まだ手つかずの自然が残るその地域一帯のニホンザルの物語。

12月18日(金) 14時

「羽子板今昔」

春日部は羽子板生産で有名。あまりみられなくなった羽根つきやその制作、さらには華やかさにひかれる女性の心を美しく描く。

「埼玉の押絵羽子板」

クリスマス子ども映画会

12月25日(金) 10時・14時

「くまのプーさん―イーヨのおたんじょう日―」 「小さなバイキンググビッキー―世界最初の消防隊―」

「ミッキーマウスのメリー・クリスマス」

おはなし会 一階鑑賞室(四歳以上)

11月12日(木)・26日(木) 16時

12月10日(木)・24日(木) 16時

「親の扶養」

「痴呆性老人を考へる」

痴呆性老人の問題は、その悲惨さばかりが強調されているが、この映画では、その不安や偏見を解消するため、最新情報を紹介し、家庭・施設・地域社会が暖かく見守る事の大切さを訴える。

名画鑑賞会

11月28日(土) 10時・14時

「喜劇の神様―ロイドの武勇伝・脱線サーカス―」

「チャップリンの舞台裏」

「チャップリンの伯爵」

クリスマス子ども映画会

12月25日(金) 14時

「クリスマスキャロル」

「金色のあしあと」

子ギツネを救い出そうと挑戦する親ギツネの限らない愛は、少年の目にどのように映ったか。

●県立川越図書館 (四六二四一五三)

郷土を知る資料展

11月10日(火)～15日(日) 9時～17時

内容 「埼玉の児童文学資料展」 埼玉県関係の児童文学作家の作品を展示・紹介する。

映画と音楽の集い

ディズニーマウスの世界

11月14日(土) 9時30分・13時30分

①CDコンサート

②映画 「ピーターパン」



11月28日(土) 9時30分・13時30分

①CDコンサート

②映画 「ふしぎの国のアリス」

移動図書館利用者のつとめ

12月1日(火) 14時10分～16時

吉見町中央公民館

演題 「絵本づくりのアトリエから」

講師 いわむらかずお氏

●県立久喜図書館 (四六三二二六五)

郷土資料展 一階集会室

11月14日(土)～22日(日)

内容 「武蔵武士とその暮らし」 貴族社会から武士社会への移行期に、郷土埼玉を舞台に活躍した武蔵武士の歴史や当時の文化等について、図書資料や写真を中心に展示紹介する。

クリスマス子ども人形劇場

12月19日(土) 14時・15時 視聴覚室

人形劇団 「みやしろ」 紙芝居と人形劇 当日先着100名(4歳以上小学生以下が対象) 入場無料

映画会 一階視聴覚室

11月6日(金) 14時

「新しいおふくろの味」

「みなおそうわが子の食事」

11月20日(金) 14時

「ばさらの時代」

「浮世絵と歌川広重」

12月4日(金) 14時

「にぎやかな家族」

東京のサラリーマン家族が関西のある同和地区に引っ越した。初めて出会う同和問題への家族一人ひとりの反応と態度の変遷を明るく伸びやかなタッチで描き、人間どうし心から結びつくことの素晴らしさを訴える。

冬休み子ども映画会

12月25日(金) 10時・14時

「オバケちゃん」

森の木のはら穴で静かに暮らしていたオバケちゃん一家。ある日、大変なことがおこった。人間達が森の木を切りやってくるのだ。

「森のなかまたち」

森の動物たちはみんな仲良く暮らしていたが、ギツネとオオカミだけはいじめやおどかしをしていた。ある日山火事がおこり、ギツネとオオカミが取り残される。そのとき森の仲間たちは……。



Q&Aコーナー

図書館は、本をどのように選び、どのように購入するのですか。

Q 図書館ではリクエストされた本を所蔵していない場合、購入もしてくれられないことでした。ではそれ以外の本はどうやって選んでいるのですか。

A 選書方法には次のようなやり方があります。

①週に一度くらいずつ、契約先の書店あるいは取次店から新刊書を送ってもらい、現物を見て選書する。いろいろな本は返す。(このやり方を見計らいという。)

②「TRC新刊案内」や「ウィークリー出版情報」など取次店が出している新刊案内や国会図書館で受け入れ整理した資料の目録である「日本全国書誌」から定期的に選書する。

③「選定図書目録」(日本図書館協会刊)のように、あらかじめ選ばれたリストからさらに選ぶ。

④から③のどの方法をとるか、あるいは組み合わせるかは、それぞれの図書館の事情によって違いま

す。

埼玉県立図書館では、主に「日本全国書誌」で選書を行っています。これは一般の流通ルートにのらない本も記載されているため、収集の網羅性を高められるという利点があります。反面、本が出版されてから三ヶ月程度たないと「日本全国書誌」に掲載されないため、購入がかなり遅れてしまうという欠点があります。

Q 県立図書館の本は、市町村立図書館の本より難しいものが多いようですが。

A はい。県立図書館では、利用頻度の低い専門的な本や高価な本も集めています。たとえ利用の少ない本でも全部の県民が対象なので、積極的に集める意味があるわけですね。このような本を市町村立図書館経由で県民に貸し出して、その活動のバックアップをするというのも県立図書館の重要な仕事です。

Q 県立図書館は、浦和・熊谷・川越・久喜と四館ありますが、集めている本の分担がありますか。

A なかなかスッキリと割り切れませんが、高度な専門図書等の収集目標として次のように分担しています。

浦和 (哲学・宗教・社会科学へ経営・教育は除く)・郷土資料)
熊谷 (歴史・地理・社会科学へ経営・教育・産業)
川越 (芸術・スポーツ・体育・言語・文学)
久喜 (自然科学・技術・児童読物児童文学研究資料)

Q 図書館が本を注文すると、どういう経路で納品されるのですか。

A 次の図をごらんください。



通常の書店ルートでは、この図のような経路で納品されます。図書館が地元の書店ではなく、取次店と直接契約している場合は、書店を経由しない分早くなりますね。

Q 図書館が本の注文を出してから、何日くらいで納品されますか。

A 平均二〜三週間以上かかります。

Q どうしてそんなに遅いのですか。

A 契約先の書店や取次店に、発注した本がないと、出版社からの取り寄せになります。出版社・取次店・書店と経由するので時間がかかるのです。さらに最近は、出版社が新刊書の初刷を、売り上げの多い

書店を指定して残らず配本してしまいう傾向にあります。そのため発売直後に図書館が発注しても、契約先の書店にないばかりか、取次店や出版社にも在庫がないということもあります。そうすると、大規模書店の店頭にはたくさんある本なのに、図書館には返品や重版を待って、二〜三ヶ月先にならないと、納品されないことになるのです。求める本が利用者の手に渡るまでには、選書・購入・受入・図書の整理等多くの過程を経る必要があります。その中で迅速な資料提供の一番の障害がこの資料購入の段階といえます。

Q 読みたい本ができるだけ早く私たち読者の手に渡るよう改善していただければいいですね。

A はい。購入方法や整理のしかた等なお一層工夫して、要望にこたえられるよう努力したいと思っています。

編集後記

秋の深まりを感じる候となりました。さて本号は、県立近代美術館の水野操大久保様に、埼玉の画家の紹介等をお願いしました。この機会に、改めて、埼玉の偉大な画家の作品を鑑賞してみたいと思います。